

についての応募・採択状況は下記のとおりである。

課題	応募	採択
計画研究1	7件 (8名)	7件 (8名)
計画研究2	4件 (6名)	4件 (6名)
計画研究3	10件 (11名)	10件 (11名)
計画研究4	5件 (8名)	5件 (8名)
自由研究	38件 (68名)	36件 (52名)
施設利用	36件 (47名)	33件 (44名)

2. 研究成果

(1) 計画研究

1-1 ニホンザルの食物パッチ利用に対する食物環境と他個体の存在の影響

風張喜子(北海道大・院・環境科学)

対応者：杉浦秀樹

前年度の研究により、食物環境だけではなく順位や伴食個体の存在などの社会的要因が、ニホンザルの食物パッチ利用に影響を及ぼすことが明らかになった。しかし、観察時期が限られ、また食品目ごとに分析が行われており、彼らのパッチ利用の全体を理解できたとは言えない。統一的な理解を進めるために、本研究では、食物資源の分布・量・質が異なる様々な時期に、食品目の栄養価を考慮しながら、食物環境と他個体の存在がパッチ利用に及ぼす影響を評価することを目的とした。宮城県金華山島のニホンザル B1 群を対象とし、食物環境の異なる時期ごとに約 1 ヶ月ずつ、計 6 回の調査を行った。様々な順位のオトナメスのパッチ利用(採食品目・取り込み食物数・食物取り込み時間・食物探索時間・滞在時間)、食物環境(パッチの位置・サイズ・食物密度)、社会的要因(順位・伴食個体・攻撃的交渉)を記録した。これらのデータと、今後行う食物資源の分布調査の結果をあわせて、食物環境(パッチサイズ・パッチ内食物密度・食物分布)および社会的要因が、栄養量の取り込み時間・取り込み量・食物探索時間・パッチ滞在時間に及ぼす影響を分析する予定である。

1-2 ニホンザルの休息場所および泊まり場選択に関する要因の評価

辻大和(東京大・院・農学生命科学)

対応者：杉浦秀樹

昨年度に引き続き、ニホンザルの泊まり場の選択と温度環境の関連性を検討した。宮城県金華山島北西部の様々な地形 10 箇所(尾根×3、沢×3、海岸、シバ群落、シキミ群落、スギ群落)に温度データロガーを設置し、2005 年 8 月 11 日から 2006 年 3 月 21 日にかけて気温を記録した。温度の記録期間中、調査対象とした群れは沢を泊まり場とすることが多く(53 日中 41 日)、また季節ごとに分けると夏(8 月)は 5 日中 3 日(60%)、秋(9-11 月)は 38 日中 30 日(79%)、冬(12-3 月)は 10 日中 7 日(70%)と、昨年度とは異なり季節の違いはあまり見られなかった。データロガーのデータと風速のデータよりサルの体感温度を推定した結果、沢ではそ

れ以外の群落と比較していずれの季節も体感温度が高かった。したがって、観察されたサルの泊まり場選択は、沢を積極的に利用することにより夜間の体温維持コストを下げる機能があると推測された。

1-3 管理を目的とした三重県下のニホンザル遺伝子モニタリング

赤地重宏（三重県科学技術振興センター）

対応者：川本芳

これまでのミトコンドリア遺伝子分析で、三重県下には2種類のハプロタイプを確認している。両タイプは異所的に分布し、この2タイプが混在する地域や群れは今のところ確認できていない。両タイプの分布は大山田村付近で南北に分かれる。県外地域と比較した結果、県南部には紀伊半島に特異的な一群のハプロタイプに属するタイプが存在することが明らかになり、JN33タイプと命名した。このタイプは奈良県、和歌山県でも確認されている。紀伊半島に特異なタイプはこれ以外に5タイプあり、滋賀県南部地域から奈良県、和歌山県そして三重県南部地域に分布する。他県ではこのうちの複数タイプが分布するが、三重県では1タイプしかない点に特徴がある。一方、県北部地域に分布するタイプは分子系統的に南部のJN33タイプとは大きく分化しておりJN30タイプと命名した。このタイプは石川県、岐阜県、滋賀県にも分布する。三重県のニホンザルではミトコンドリア遺伝子のタイプ数は少ないが、タイプ間の塩基配列にはちがいが大きいといえる。これら二つのタイプを利用したモニタリングにより、県内の南北地域間のオス拡散が調査できる目処がたった。

1-4 房総半島におけるニホンザルとアカゲザルの交雑に関する研究

萩原光（房総の野生生物調査会）、相澤敬吾（館山高等学校）

対応者：川本芳

千葉県で確認されているアカゲザルを含む群れの生息地はニホンザル生息域から約15kmしか離れていない。今年度5月、初めて千倉町に入り行動域が北東方向へ拡大したのを確認した。このことは従来のニホンザルにとって交雑の脅威となっている。平成15年度にはアカゲザル生息域内で、平成16年度にはニホンザルの生息域内でそれぞれ交雑個体が確認されている。本研究では12月にアカゲザル生息域で採集された糞サンプル（48試料）についてミトコンドリアDNAの遺

伝子配列解析を実施した。分析の結果、41試料がアカゲザルタイプ、1試料がニホンザルタイプと判断できた（6試料は判定不能）。性別分析ではアカゲザルタイプのうち17試料がメス、7試料がオスと判断できた（判定不能6試料）。また、ニホンザルタイプの1試料については性別の判定はできなかったものの、糞サイズから若齢と判断され、アカゲザルを含む群れで出生したものと推測された。今後、アカゲザル生息地のみならず、ニホンザル生息域においても交雑の進行状況をモニターしていく必要があると考える。

1-5 保護管理にむけた中部山岳地域のニホンザルの遺伝的多様性解析

森光由樹（野生動物保護管理事務所）

対応者：川本芳

報告者はこれまで、中部山岳地方、特に長野県内4つの地域個体群に生息している個体から試料を採取しミトコンドリアDNAのDループ可変域、412塩基対の配列を解読し7つのハプロタイプをあきらかにした。今年度は、情報の少なかった上信越地域個体群の東側地域（群馬県、新潟県）および日光地域個体群西側地域（群馬県、栃木県）に生息している22頭のメスおよびコドモから試料を採取し、同法にて塩基配列の解読を行った。その結果、日光地域個体群では、東北の1型、日光・今市の4型、栃木県佐野市の5型が検出された。また、上信越地域個体群では東北系統1型、4型、5型に加えて東京都奥多摩・埼玉県秩父の9型、奥多摩・秩父に近い55、56型、軽井沢の16型、北アルプスの17型が検出された。特に群馬県北部、谷川岳周辺では隣接している群れの遺伝子タイプがそれぞれ異なり、東北系統、奥多摩秩父系統、北アルプス系統が混在していた。これまでの結果からニホンザルが西から東へと分布を広げる際、群馬県北部、水上町周辺を起点に関東・中部から東北地方、新潟北部へ分布を広げた可能性が考えられた。

1-6 ウマヤザル信仰に伴う頭蓋骨の調査による口承と生息分布域の相関関係

中村民彦

対応者：川本芳

ウマヤザル信仰とは厩に猿の頭蓋骨や手を祀り牛馬の無病息災や家内安産、五穀豊饒を祈願したものである。当信仰は東北全域に流布していたが、近代から現代における残留形態や口碑の全容は十分に解明されていない。更にこれに関係するニホンザルの捕獲や捕